

カズの書道講座 (八)

今回は、二月に山梨県下で一番歴史のある席書き大会が実施されましたので、その受賞した作品から学んでみたいと思います。

はじめに

本年二月二日(日)に、山梨日日新聞社主催の「第74回山日YBS席書き大会」が開催され、九日(日)に公開審査が行われました。その結果は十七日(月)の新聞に発表され、二十日(木)から二十三日まで甲府・山交百貨店で展示されました。

この大会については、フットステップのNo.7(18年4月号)からNo.10に亘り「画一化した審査」として掲載しましたが、八年経過した本年も体制は全く変わっておりません。相変わらずの多数決審査で行われていますから、同系色の強い作品ばかりが受賞しています。余白は無視され、何でもかんでも大きく紙いっぱい書けばそれでよい、というような気がしてなりません。このコーナーでは、大会大賞受賞作品(中三・霊峰富士)から余白のとり方や構成などを考えてみます。

余白を大切に

皆さんも確かめて下さい。私たちが臨書して学ぶ古典に、狂草書は別として、文字を紙いっぱい書いて余白を無視したものがあられるでしょうか。顔真卿の顔子家廟碑でも余白は見えます。

このことを考えますと、今回特別推薦などに受賞したほとんどの作品は、文字が大きすぎて余白を見ることが出来ません。こういう作品は確かに力強く感じますが、まるで人ごみの中を、無謀に押しつけ

て歩いている人の姿によく似ています。やさしく歩いていると弾き飛ばされてしまいますが、私はその弾き飛ばされた作品の中に、いいものがあるような気がしてなりません。

字形を考える

図・①をご覧ください。

大会大賞の作品の輪郭を大胆にとつてみました。

こうして見ますと、「霊と富」は非常に類似した字形であることが分かります。同時にカムリりの所が、並んで揃っていることも分かります。「峰と士」の張り出した所も揃い、間が狭くなっています。

したがって、この課題を書く時のポイントの一つは、「霊と富」「峰と士」の張り出た所が、揃わないように考えるということです。

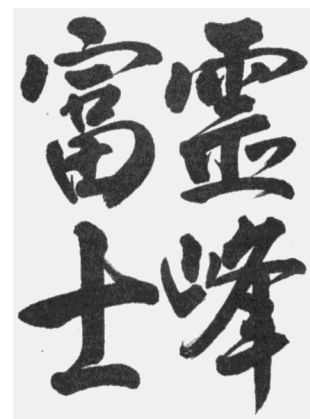
そこで参考までに、図・②のように考えてみましたので解説したいと思います。とにかく書きにくい課題ですから、柔軟な思考力が要求されます。

「霊」は一画目を長くのばし、字形を逆三角形にしました。このような字形は、何紹基や趙之謙の作品によく見られます。

「峰」は「峯」の文字を使い、タテ長にして「霊」との一体化を求めました。「霊と峯」は連続し、流れが出てきます。

「富」はウカムリりの終画が、アメカムリりの一画目と二画目の間の空間に入れ、線のぶつかりを避けるようにします。ここまでは「霊」から墨は継がず一気にかきます。

「士」は一画目の終筆部をやや下げて、「峯」の左斜線と筆脈が揃わないようにします。画数も少ないので、タテ画を太くして重さを出します。また位置によって重さが変わりますから、下の空間の面積をよく計算することが大切です。



第74回山日YBS席書き大会
大会大賞作品

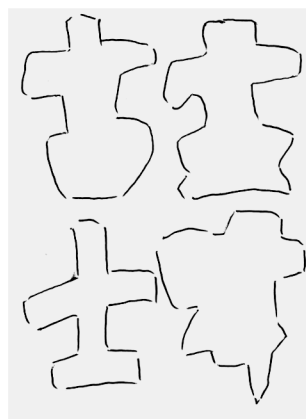
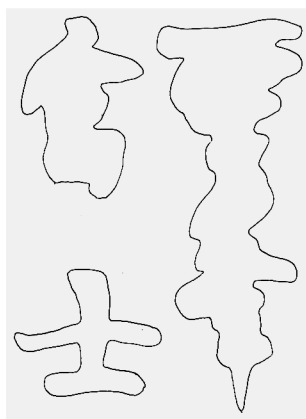


図-①
大賞作品を大胆にとつた輪郭
字形がよく分かるようにした



図-②
大賞作品の課題から考えた
主幹の参考作品



参考作品を大胆にとつた輪郭
字形がよく分かるようにした